



TITLE:

書評 Rudolf A. Makkreel, Sebastian Luft  
(eds.), Neo-Kantianism in Contemporary  
Philosophy (Indiana University Press, 2010,  
x+331p.)

AUTHOR(S):

赤嶺, 宏介

---

CITATION:

赤嶺, 宏介. 書評 Rudolf A. Makkreel, Sebastian Luft (eds.), Neo-Kantianism in Contemporary Philosophy (Indiana University Press, 2010, x+331p.). 哲学論叢 2010, 37(別冊): S151-S154

ISSUE DATE:

2010

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/128968>

RIGHT:

## 書評

Rudolf A. Makkreel and Sebastian Luft (eds.), *Neo-Kantianism in Contemporary Philosophy* (Indiana University Press, 2010, x+331p.)

赤嶺宏介

本書は、新カント派というかつて存在した哲学的運動ないし学派をめぐって、英語で出版される最初のものであることを自負して編まれた論文集である。その目的は、新カント派を哲学史において正当に位置づけなおすことである。

新カント派は、1870年頃から、第一次世界大戦の時期にかけて、アカデミーの哲学の中心のひとつをなしていた。ドイツのみならず、フランスにも有力な哲学者が輩出する(したがってまた大正以降の日本哲学に与えた影響も大きい)。にもかかわらず、現在、哲学史的叙述において、新カント派に与えられた場所は、せいぜいのところ、きわめて限られたものでしかない。

編者は、このように現状を認識したうえで、この現状に抗し、新カント派の意義を、それが当時占めていた位置と、現在占めている位置との双方から考える。すなわち、19世紀から20世紀への移行期、哲学史上の「主要な」登場人物(編者は主に、現象学、解釈学、生の哲学、ウィーン学団の哲学者たちを想定している)にとっての背景、および、みずからの立場を確立するうえで

の参照枠としての意義と、現代哲学におけるいくつかの主要な問題(編者は、その例として、心の哲学における主観性の問題を挙げている)の先取りとしての意義である。つまり、編者のとった戦略とは、主に、新カント派がマイナーであることを認めたくて、それを現代の我々にとって関心の大きなもの、あるいはメジャーなものと関係づけていくことであるといえる。

この戦略のもと、新カント派の体系を明らかにし、それを歴史的に位置づけることを編者は意図し、本書の全体を以下の4部に分かつ。すなわち、新カント派と同時代の哲学との関係(第1部)、超越論的哲学としての新カント派の体系(第2部)、新カント派と自然科学との関係(第3部)、新カント派と人文科学との関係(第4部)。この下に12篇の論文が収められている(各論文の概要については、本書 pp. 14-19 において編者によるその簡潔な紹介を読むことができるので、そちらを参照されたい)。

この4部構成それ自体の是非はいま措くとしても、実際にその構成に従って論文が編まれる仕方には、しかし、疑問の呈される余地がある。恐らく、編者である Luft が現象学を、Makkreel がデヒルタイないし解釈学を主に研究しているせいで、新カント派と比較されるべき同時代の哲学の選択に偏りが見られるのである。とりわけ第1部にそれが顕著であり、実際、上述のとおり「新カント派と同時代の哲学との関係」に割かれたこの部は、正確には「現象学、解

釈学、および新カント派」と題されることになる。

とはいえ、これは比較的些細な点であるかもしれない。それよりも重大なのは、編者が新カント派の哲学史的再評価を目指しているながら、実際には、(それに成功しているのか否かが問題となる以前に)そもそも、それを目的としている論文自体が極めて少ないことである。殆どの論文は、新カント派の哲学とその他の哲学との比較やその間にある影響関係の確認にとどまっているか、新カント派に属する特定の哲学者の哲学の体系的叙述にとどまっている。いずれも、本書が目的とするような新カント派の哲学史的再評価には十分ではないように思われる。

一方において、比較や影響関係の確認にとどまるものについていえば、その原因の一端は、上述した編者の戦略そのものにあるように思われる。避けねばならぬ危険は、ある哲学の意義を、他の哲学の背景であることにのみ求め、他の哲学との比較にのみ基づけることにより、結局、既存の哲学史の追認どころか、強化に奉仕することである。本書によって、新カント派が位置づけられるべき場所とは、実のところ、時として周到に仕組まれた墓穴ともなりうるのではないか。

他方において、体系の叙述にとどまるものとしては、たとえば、新カント派の流れを汲むフランスの哲学者エミール・ブートルーの哲学の詳細な叙述(第3部、第9章)

などは、英語で読むことのできる貴重な文献に数え入れることができるだろうが、このような論文そのものが、本書の目的である、新カント派の哲学の哲学史的再評価をなすものとはやはり言いがたい。

そのような再評価には、ごく単純に言って、新カント派の哲学のいわば「内的(intrinsic)」評価と「外的(extrinsic)」評価(他の哲学との比較)とがともに必要であると評者は考える。言うまでもないようだが、これは各論文の負う責任では決してなく、みずからの目的にふさわしく論文を編むべき方法の負う責任である。それぞれの論文固有の価値にもかかわらず、本書は全体として、既存の哲学史の改訂を促すことには成功していないのではないか。このような疑惑を評者は抱く。

それでは、どうすればよいのか。カントの批判主義を蘇らせ徹底しようとする新カント派の「内的な」積極的な評価は、まずもって、カントとの「外的」比較あるいは対決とともになされなければならないだろう。この点において、Manfred Kühn の論文 "Interpreting Kant Correctly: On the Kant of the Neo-Kantians" (第2部、第5章)は、カント解釈に関して、新カント派の本質的特徴を明らかにするとともに、その勃興から没落までを驚くべく簡明に述べたものでもあり、この論文の価値は、上述したような本書全体の不備を補って余りあるように思われる。

本章の叙述を手短に紹介しよう。本章に

において、新カント派とは、通常考えられているように、コーエン、ナトルプ、カッシーラーを代表とするマールブルク学派と、リッケルトを代表とするバーデン学派（西南ドイツ学派）とを指している。両者は、ともに、カントから受け継がれた超越論的観念論によって特徴づけることができる。つまり、それは、超越論的実在論のみならず、心理学的な観念論をも拒否する。そして、意識の主観性ではなく、思考の論理の客観性を主張する。とりわけマールブルク学派に顕著であるが、この観念論は、カントの超越論的感性論を超越論的論理学に還元し、直観の形式たる空間・時間を、思考の形式たるカテゴリーと見做すまでに至る。これは明らかにカントの忠実な解釈ではない。これはカントのプラトン化、プラトンのカント化としての観念論であるといえる。ただし、マールブルク学派とバーデン学派とは異なる。前者が倫理学すら論理学に還元しようとするのに対し、後者は理論的思考の根底にすら価値を置く。また、いわば前者は認識論であり、後者は存在論であるとして特徴づけることができる。（バーデン学派の価値論は、その当時非常な影響力をもっていた哲学者ロツツェに負う。彼は、カントとプラトンとの接続に関して、マールブルク学派にも影響を及ぼしている。なお、ニーチェの価値論は、ロツツェと新カント派の価値論への攻撃である。）ところで、ハイデッガーは、マールブルク学派のカント解釈、すなわち感性論の論理学への解消

を批判する。しかし、彼のカント解釈もまた、本性を異にするふたつの能力をひとつの心理学的能力に還元する限りにおいて、カントの「正しい (correct)」解釈とはいえない。哲学史にはふたつの理想がある。一方は、哲学者自身の生きた時代の文脈に即した厳密な解釈。他方は、哲学者自身のものではない、「我々」の現代的問題に発する、その哲学者の思想の（再）構成。新カント派はハイデッガーと同様、後者の理想をとった。新カント派の没落の原因のひとつは、カントやプラトンの問題とは異なり、彼らの問題が、もはや「我々」のものではないからである（pp. 113-131）。

このようにして Kühn は最後に新カント派を簡単に葬り去る。しかし、その仕方は疑わしい。なぜ新カント派の問題が「我々」自身の問題でないと断言できるのだろうか。勿論、およそ 100 年を隔てて、問題の内容は異なるはずである。しかし、その意味において、問題が共有されていないというのであれば、カントの問題もまた「我々」は共有しまい。古代の哲学者プラトンの問題とあっては、言うまでもない。勿論、問題が「我々」によって共有されないことは、Kühn によれば、新カント派の没落の原因のひとつにすぎない。他に、社会的・政治的要因が考えられるだろう（これについては、p. 7 を参照されたい）。しかし、Kühn の挙げる上述のごとき原因は、諸原因のうちのただひとつとしてさえも認めることが難しい。

したがって、新カント派の問題は、問題の内容にとどまらないというべきである。この点で示唆的なのは、Massimo Ferrari の論文 “Is Cassirer a Neo-Kantian Methodologically Speaking?” (第4部、第12章) である。彼は、カッシーラーと、その先行者コーエンおよびナトルプとの差異を認めつつ、その方法論を考察することで、マールブルク学派における伝統の連続性と、その変容(破壊でなく)を見出す。新カント派の方法は、「我々」にとっても、いまだ共有しうる有効な方法たりうるのではないか。

編者による序論では、いくつか断片的に新カント派と現代の哲学との関係が言及されるにとどまっているが、Steven G. Crowell の論文 “Transcendental Logic and Minimal Empiricism: Lask and McDowell on the Unboundedness of the Conceptual” (第2部、第7章) は、本書では殆ど唯一、近年の哲学と新カント派の哲学との関係を詳細に論じた章である(その外には僅かに、第3部、第8章において、Michael Friedman が、トーマス・クーンとカッシーラーとの比較を簡単に行っているのを読みうるばかりである)。本章では、現代の哲学者ジョン・マクダウェルとバーデン学派の哲学者エミール・ラスクそれぞれによる、カントの超越論的論理学の解釈を比較することを通じて、「心と世界」の関係に関して、両者の超越論的な思想、すなわちマクダウェルの「概念的なものの非有界性 (unboundedness of

the conceptual)」とラスクの「真理の無制限性 (Schrannenlosigkeit der Wahrheit)」との比較・対照が行われる。マクダウェルにおけるカントおよびヘーゲルからの影響を考慮に入れるとしても、マクダウェルとラスク両者の概念や思考の一致(より精確にいえば)接近は、あくまでも筆者 Crowell 自身によってなされるものであり、ラスクからマクダウェルへの影響関係に基づくものではないようである。これが事実であれば、マクダウェルとラスクにおける一致あるいは接近は、(歴史的な)必然性を有しない。しかし、少なくとも、その偶然の一致ないし接近を見出す「我々」においては、その一致ないし接近が、思考の内容ではなく形式あるいは方法に関して、また方法として、意識される限り、新カント派が、新カント派の方法(あるいは形式)にふさわしく、いまなお生きることができるはずである。

「我々」が新カント派の哲学史的再評価を企図するとき、このことが理解されるならば、本書に収められた諸論文の多くは、遂行されるべき「内的」評価と「外的」評価に寄与するものとなるだろう。その意味において、本書は、小さからぬ価値を有するのみならず、その本来の目的を見失うこともあるまい。